

聖徳太子との出遇い



大谷大学 文学部 歴史学科 東館 紹見

・本年（2021年）＝聖徳太子1400回忌に当たる。
*聖徳太子（574～622）

改めて、私たちにとって、聖徳太子とはどのような人か、
また、その人に出遇うということはどのような意味があるのか、
この機会に確かめてみたい。

*親鸞（1173～1262）＝2023年が、誕生850年を記念する年。
真宗大谷派（東本願寺）：
「宗祖親鸞聖人 御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃法要」を勤修。
親鸞＝自らの歩みを進める上で、「生涯を通して、聖徳太子に護られ、
育てられ続けた」と語っている。



聖徳太子とは？



- 聖徳太子
= 現在、私たちがイメージする聖徳太子 とは・・・
- 「旧一万円札」（1958年〈昭和33〉～1986年〈昭和61〉発行）
でもおなじみだったように、
あらゆる立場の人々がその存在を知っている。
- しかも、ほとんどの人に好感を持たれている
（嫌い、苦手、という人が非常に少ない）。
- 伝承的な部分が非常に多い。（実像がなかなかわかりにくい）
* 「聖徳太子は実在しなかった！」
（大山誠一『聖徳太子の誕生』1999年、吉川弘文館 他）



百円札（1944～45年）



一万円札（1958～84）



五千円札（1957～84年）

①政治家（為政者）としての聖徳太子

日本が中国（隋）にならった
中央集権的な国の体制を造っていく
最初の時期に
政治を担った人。

(1)新しい時代をひらく政治を行った人

- 中国の文化を移入
(遣隋使の派遣、学者・僧の受け入れなど)
- 一人一人の能力を重視する登用のしかた
(冠位十二階)
- 政治の方針＝「憲法」を定める
(憲法十七条)

(「唐本御影」)





聖徳太子二王子像（唐本御影）8世紀
御物（旧法隆寺蔵）



(2)施政に仏教の思想を積極的に取り入れた人

- 施政に仏教の思想を積極的に取り入れる
(憲法十七条、三宝興隆の詔)
(「摂政太子像」)
- 慈しみ深い
(憲法十七条、父への孝養、多くの訴えを
同時に聴く、片岡山飢人説話)
(「孝養太子像」(十六歳像))





②仏教者としての聖徳太子

(1)施政に仏教の思想を積極的に取り入れた人（前述）

(2)自ら仏教を深く受け止め、様々な仏教的営みを行った人

②仏教者としての聖徳太子・・・(2)

- 寺院の建立（四天王寺、法隆寺など）
 - * 「太子建立七大寺」 （法隆、法起、橋、中宮、葛木、四天王、広隆各寺）
- 仏教思想への深い理解、受け止め
 - （三経義疏の編纂、経典の講説、天寿国繡帳）
 - * 「一乗」「大乘」「在家者の仏道」の重視（「講讃太子像」）
 - * 幼少期からの受容（受胎説話、二歳太子像）（「南無仏太子像」＜二歳像＞、七歳像）



聖徳太子 勝鬘経講讃図
 14世紀 会津・光照寺蔵
 光明本尊より(部分)

真宗大谷派 井波別院
 瑞泉寺 太子堂内部
 南無仏太子像

②仏教者としての聖徳太子
 さらに・・・、
 ⇒ (3)観音菩薩(救世観世音菩薩)の化身(垂迹)
 としての聖徳太子 として展開していく。
 (『三宝絵詞』『聖徳太子伝暦』
 = 10世紀以降に顕著になる)
 (法隆寺夢殿 救世観世音菩薩像、
 四天王寺 如意輪観音像、
 六角堂 如意輪観音像)

語られてきた聖徳太子(第1の姿)
 (国家によって造られた聖徳太子像)

- ・新しい国家体制を造り上げた人
- ・「積極外交」を推進した人
- ・慈しみ深い人
 そして・・・(その文脈の中で)
- ・仏教を重んじた人
 (8世紀～・・・・・・近代く!)

語られてきた聖徳太子（第2の姿）
（仏教の側によって強調されていった聖徳太子像）
・ 仏教への理解・信仰を政治に用いた人
・ 仏教への深い理解・信仰に基づき生きた
 慈しみ深い人
⇒ 観音菩薩（救世観世音菩薩）の化身（垂迹）
 としての太子
 （〈8世紀〜〉9世紀〜 中世 ~ 近世）
 * 明治以前までは、むしろこうした面が主。●

**観音菩薩（救世観世音菩薩）の化身（垂迹）
としての太子**

=（古代〜中世の移行期のころから）
それぞれ少しずつ自立性を高めてきていた
（= 国からの給付を受けられなくなってきた）
各寺院・各宗派によって、自分たちの正当性を
示す存在として語られていく。
* 四天王寺、六角堂、叡福寺、法隆寺、広隆寺・・・●

観音信仰

主な典拠：『法華経』の「観世音菩薩普門品」
（=「観音経」）

観音菩薩が、様々な姿を現わして人々を救う。

六観音：「千手観音」「十一面観音」

「如意輪観音」など。

→ 三十三観音（観音三十三身）

→ 観音霊場の形成

→ 人々の参詣・参籠・巡礼 ●

⇒こうして仏教側から語られ始めた
観音と一体化した形での太子像は、

また、**人々が切実に求める太子像でもあった。**
(それぞれに、主従関係などの様々な関係を結び
生きていかななくてはならない)
=中世社会における人々、各勢力が、それぞれに
求めた太子像でもあった。=**太子信仰の成立**

聖徳太子と親鸞

聖徳太子と親鸞

親鸞=生涯にわたって聖徳太子を讃仰

(文人貴族=あるべき政治の姿を表現する家
に生まれる) *縁としての世系

(9歳の時、天台宗の僧侶に。

→「一乗」「大乘菩薩道」の仏道に出会う)

((1)19歳 河内・磯長の太子廟(叡福寺)で
聖徳太子からの夢告を受けるという。

*「日域は大乘相応地なり。」)

19歳 磯長・太子廟での夢告



京都・青蓮院植髮堂「観聖人絵伝」 京都・東本願寺蔵 叡福寺「聖徳太子絵図」

*いずれも、小早川延古の作品。
大正～昭和期に活躍した日本画家。島根県日野郡日野町の真宗大谷派光徳寺の生まれ。
大谷大学所蔵「観聖人像」の作者。挿絵画家としても活躍。兄の小早川秋聲も著名な日本画家。

29歳 太子建立とされ、本尊の如意輪観音＝救世観音とされていた六角堂に100日間の参籠をこころざす。

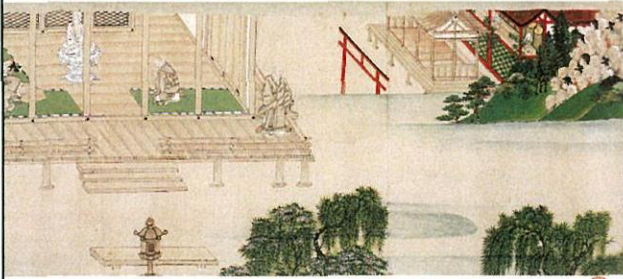
当時の六角堂＝多くの人々が、観音菩薩による救済を求め参詣・参籠し、切実な祈りをささげる場であった。

当時の六角堂の本尊 如意輪観音の救いとされていた内容（一例）
（典拠：『覚禪鈔』＜真言密教の聖典＞）

「もし出家者・修行者が、自分中心の心を起こしみだらな性欲が盛んになり、修行者として墮落しそうになったら、如意輪観音である私が、その対象である女性になりましょう。そして、修行者の親しい妻妾として、その生活を「福貴」で「無辺の善事」（＝墮落ではない）に満ちたものにし、仏道修行を成就させ、極楽浄土に往生させます。」というもの。



親鸞 29歳 六角堂での夢告



親鸞伝絵（康永本）（東本願寺蔵）<康永2年（1343）11月2日成立> 「六角夢告」段

(2) 親鸞 29歳 六角堂での如意輪観音=救世観音=太子からの夢告

行者、宿報によって 設い女犯すとも、
我、玉女の身となって 犯せられん（「被犯」）。
一生の間、能く莊嚴して、
臨終に引導して極樂に生ぜしむ。

（あなたが、自分の思いをはるかにこえた様々なつながりや行為の報いとして、その女性とともに歩みたいと思ったならば、その女性は、この私（観音）です。

私は、たとえあなたから傷つけられる（=犯、被犯）ことがあったとしても、あなたと一生涯ともに歩み、あなたが亡くなる時には、極樂浄土に往生させる、すなわち、あなたが「本当に良かった」と思える人生にします。）

ここでの、ともに歩む存在としての観音

= 親鸞が女性と結婚してともに歩むことに対して、
単に、許諾・許容、或いは正当化してくれる存在ではない。

むしろ、ともに歩む相手側の視線から、
「ともに歩むことになったら、私はあなたに傷つけられる
でしょう。ともにあゆむ、とは、そういうことです。

それでも、私は、あなたと一緒に歩むのです。

ともにあゆむ、とは、そういうことです。」

と、親鸞（相手とともに歩もうとしている人）に告げている。

= 明確な態度表明、或いは、指弾 とさえいえるような内容。

→ 「これはこれ我が誓願なり。一切群生に聞かしむべし。」

親鸞＝法然上人を、勢至菩薩（観音菩薩とならび、阿弥陀如来の脇士をなす。阿弥陀如来の光く衆生の闇を照らすはたらき）を象徴する存在）として、生涯にわたり敬う。

一方で聖徳太子を、観音菩薩（勢至菩薩とならび、阿弥陀如来の脇士をなす。ともに歩むはたらきを象徴する存在）として、生涯にわたり敬う。

親鸞にとっての聖徳太子

当時、流行していた観音信仰・太子信仰の影響下にありつつも、単に自分に「寄り添い」「優しい」、都合の良い存在としての観音信仰・太子信仰とは、明確に一線を画する。

⇒どこまでも自分とともに歩みつつ、阿弥陀如来のいのちと光のはたらきを、最も近いところで厳しく温かく伝え、現実を歩ましめる存在。

- (3) 83歳？『高僧和讃』末尾に、太子の名と生年月日、仏滅後1521年（＝未法）の誕生と記す。
- (4) 83歳 『皇太子聖徳奉讃』75首を著す。
- (5) 84歳 2月9日 門弟の蓮位、聖徳太子が親鸞を「敬礼大慈阿弥陀仏～」と礼拝する夢告を得る。
翌年 2月9日 親鸞、「弥陀の本願信ずべし～」との和讃を夢告で受ける。
(承元の法難からちょうど50年目)
- (6) 同歳 『西方指南抄』に「如意輪の法は、不浄をはばからず」との法然の言葉を記す。
- (7) 85歳 『大日本国聖徳太子奉讃』114首を著す。
- (8) 同歳 『正像末和讃』に太子和讃2首を記す。
- (9) 同歳 『上宮太子御記』を著す。
- (10) 86歳 『尊号真像銘文』（広本）に「皇太子聖徳御銘文」を加筆する。
- (11) 88歳 『皇太子聖徳奉讃』11首を著す。

『皇太子聖徳奉讃』（11首）（88歳の筆）

第6首

大慈救世聖徳皇 父のごとくにおわします
大悲救世観世音 母のごとくにおわします

第8首

和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし
一心に帰命したてまつり 奉讃不退ならしめよ
*和国の教主（釈尊）：「世尊」「世間解」発遣の釈迦=立像

第11首

聖徳皇のおあわれみに 護持養育たえずして
如来二種の回向に すすめいれしめおわします



常にともにありつつ、

自らに、出会い（=出遇い）の本当の大切さ、
尊さを、示し続ける存在。

それが、親鸞にとっての聖徳太子であった。

（*私にとっての「日本仏教」、「大乘仏教」、
「具体的場としてのともにある存在」の意味）